円盤と宇宙哲学の研究誌

日本GAPニューズレター

第30号

昭和40年12月1日発行

日本ＧＡＰニュ ーズレター

—１９６５—

第３０号目次

個人の分析と想念のコントロール ……Ｇ・アダムスキー　1
ジョージ・アダムスキー ……デスモンド・レズリー　3
円盤対政府 ……アリス・Ｋ・ウェルズ　7
最近の円盤情報 ……Ｃ・Ａ・ハニー　9
トピックス ……12
質疑応答 ……Ｃ・Ａ・ハニー　16
南極の円盤騒動 ……ダン・ロイド　18
視角に関する一考察 ……Ｔ生　23
テレパシー講座　7 ……Ｃ・Ａ・ハニー　24

個人の分析と想念のコントロール（遺稿）

ジョージ・アダムスキー

求道的な人ならほとんどだれでも、人間の向上という点で自分が直面する問題をときとして考え、ときどき小さな光明を見出しますが、自分と自然との関係や人類との関係の完全な概念をつかむことはなかなかできません。

人間の心はそわそわして急速に結論に達しようとするものですから、現象の奥にある真のパックを見ることができないのです。心がみずから平安を体験するほどに平静な状態になりませんので、〝宇宙の意識〟との完全な一体化を得ることが不可能です。

あなたがとらねばならぬ最も重要な段階は、セルフコントロール（自制）の練習です。〝心の動き〟においては特にそうです。想念はきわめて急速に心の中を通過しますので、それがコントロールされない場合は暴走する列車にたとえてよいでしょう。しかし想念のスピードは列車のスピードどころではありません。これがコントロールされないと自身や他人に大変な危害を与えることになりがちです。機関士は自分の機関車を走らせる機械類を完全にコントロールする必要があります。さもないと多数の人命が危険にさらされることになりますので、機関士の責任は重大です。もし彼が一般人と同様にそわそわした短気な状態で行動するならば、列車をコントロールすることの重要さに気づかないでしょう。

人間が自己の想念をコントロールしないとき、自分の気ぜわしい心が他人にたいして起こすかもしれない危険に気づきません。

人間が起こす何かの想念は空間に放射されます。それを制することはできません。なぜならそれは絶えず進行し、どこかで具体的な働きを起こすにちがいないからです。想念は他の波動に接触する際それに影響を及ぼしますし、また想念は肉体内に宿っています。それが良き想念ならば肉体内ばかりでなく空間においても多くの有益な働きをし、それが接触する物体すべての内部に調和ある振動を起こします。もしその想念が快いものでなければ、同じ働きが起こるけれども、それは空間で有害な働きをし、そこで類似の性質の事件を自身のほうへ引き寄せ、肉体内に不調和な状態を起こし、平穏な細胞すべてを混乱させます。かかる状態で続く想念は結局は肉体全体をアンバランスにし、その内部に苦痛をひき起こします。

バランスのとれた肉体とは自然のままの安らかな調和した状態にある肉体です。この場合細胞のすべては各自の仕事を正常に遂行します。この状態にあると肉体は身軽になり、宇宙の意識と一体化します

心身共に健全になろうとする人は自分の想念をコントロールすることを学ばねばなりません。また、想念は強力であって、本人の選び方次第で建設的な方向にも破壊的な方向にも向けることが

できる事実を知る必要があります。ときとして習慣を打ち破るのはきわめて困難で、これまで暴走させていた利己的な想念は、直接に放射される破壊的想念よりもコントロールするのが困難です。

自由意志を持つ人間が、自分に最も苦痛を与えるような方向にのみその自由意志を応用するというのは奇妙です。ときとしてこれは他人から同情を得るために故意になされることがあります。またときには他人の注意を引くためにやります。自分がグループの中できわ立った人間であるというふうに考えて、それが自己のエゴを満足させるからです。かかる人はそのようなやり方で他人が注目してくれるものではないということを考慮に入れていません。なぜなら〝意識〟はえこひいきしないので、だれでも右の人から受ける影響によってその人の内心を知ることができるからです。これはもちろん本人の個人的なエゴの拡大を阻止します。人間が自分こそ最も重要な存在だと確信するために、自分で行なう行為を通じていかに莫大なエネルギーが浪費されることでしょう。虚栄と利己主義という面で自己の存在の強さと力を行使することは本来人間に許されていることではありません。人間は自己のより大いなる〝真の自我〟にたいする謙虚な召使いたるべく創られています。ゆえに人間はこの事実に気づいて頑固な優越感と尊大さを捨てない限り、万物の創造者である〝宇宙の意識〟との正しい関係を確立することはできません。

かかる自我の虚偽性を排除するのは容易なことではありません。〝虚偽性〟は長いあいだ人類の承認を得てきましたので人間の支配者になっています。しかしあなたが生命界における自己の地位を見出そうとするのならば、自分の利己性を高次な活動の分野に変形させねばなりません。

これは少数者でなく多数者のために有利になるような奉仕の方法を見つけることによって最も容易に成就されます。あなたが他人にたいして奉仕を行なえば行なうほど自分を個人として考えなくなります。人間が自分自身を何かの義務を果たすために創造された一径路とのみみなすことを知り、その義務を果たすことが必要なのだとだけ考え、その奉仕の好機を与えられたことを喜ぶならば、そのとき本人は〝父〟の仕事についていることになります。その仕事とは何かということになりますが、或る人は大衆にむかって奉仕することに適しているでしょうし、或る人はどこかのひっそりした場所で最もすばらしい仕事を見つけるかもしれません。そこでは個人的に決して知られることはないかもしれませんが、みずから姿を現わしてくる仕事類にたいして非個人的に働く限り、本人は立派に奉仕していることになるのです。

生命の目的は個人的に物事に上達することではなく、宇宙的な意味であらゆる行為を統合することにあります。この広大な世界で個人的な思考を保つのを助ける想念なら何でも持続されねばなりません。もし人間がちょっとのあいだ宇宙的な想念を持って、のちに自我へその想念をもどすならば、建設的な奉仕の分野に変えられるはずの多くのエネルギーを無駄に拡大することになります。

各人は人間としての想念を高めるために自分独自の方法を発見しなければなりません。自分自身を研究し、自分の心が働く様子を研究しなければなりません。自分の行為と反応とを観察し、いかなる想念が自分の肉体内に最も平安な調和ある状態を生じるか

を調べる必要があります。全く同じ人間は二人といないからです。教師は研究者すべてに普遍的な法則を伝えるでしょう。　各人はその法則をそれぞれ異なる方法で応用することです。

各人は生涯において遂行するべき運命をになっています。或る人にとってはそれは恐怖を克服することであるかもしれませんし、或る人にとっては嫉妬心を絶滅することであるかもしれません。或る人は困難な仕事を行なうことによって報いを得るでしょうし、或る人は深い信仰によってそれを得るでしょう。高位の人は謙虚さを学ばねばなりませんし、生来謙虚な人はその柔和な性質を積極的な活動性と結びつける方法を見出さなければなりません。各人によって方法は少しずつ異なるのです。

人間は先ず自分自身を発見し、次に一個人としての自分の義務を、万物と自分との関係を、万物を通じて現われている意識や英知との一体性を発見しなければなりません。誠実、正直、愛などによって得られる知識と知恵の量は無限です。かかる有益な奉仕の生活に自分を投げ出した場合、いかなる特権が人間に与えられるでしょうか。それはあらゆる生命との相互関係にあるという広大な概念に通じる真の航路で人生という船をあやつるために人間がなすかもしれないいかなる努力にも相当するほどの価値があります。そのとき人間はイエスが言ったように心から言えるのです。「私と父とは一体である」と。

ジョージ・アダムスキー

デスモンド・レズリー

円盤研究界のあらゆる人々のなかでジョージ・アダムスキーは唯一の最も議論の的になる人物として存在している。他の多数の人が惑星人とコンタクトしたと称し、それらが寛容でもって認められたり信じられたり、おもしろそうな軽蔑の目で見られたりしてきたが、悪口、賞賛、驚嘆の嵐をひき起こすにはジョージはただ口を開きさえすればよかった。

他の人と同じほどに私は彼についてよく知るようになったと思う。数度彼と共にすごして一般にほとんど知られていない隠れた面を発見した。話好きで、はでな、むしろ荒っぽい外面の奥には偉大な人間性がひそんでいたのである。彼の性質のなかにある或る種の気まぐれ性はこの偉大さを隠すのにしばしば骨折ったし、むしろ真実の彼よりははるかに浅薄な人間という一般向けの顔を見せていた。

彼はいかなる人物であったのか？

たしかに尋常な人間ではない。肉体的にはポーランド人で、少しばかりジプシーの血が流れていると思う。きわめて強健で、男

ぶりがよく、燃えるような黒い目を持っている。精神的には一個人どころではなかった。公開講演を行なう際のジョージを私は最も嫌った。彼は聴衆の前では話が下へ手だった。神経質で、混乱して、一挙に多くを語ろうとした。彼にとって群集は魅惑的だったが、しかしそれを恐れた。演壇にいる彼しか見ない人は失望して去って行ったにちがいない。すると今度はくつろいだ気ままなジョージが出現する。こぎれいな顔のわりに鋭い目をして、はたの澄まし屋をギョッとさせては茶目な喜びにひたったりする世間なみの飲み手のジョージである。

最後には別なジョージが出現する。美しい表情の、賢明な、親切な、自己の任務の重要さを深く認識したジョージである。このときのジョージの中に〝主〟が現われるのを私は数度ちらりと見た。その後再びカーテンがおろされて浮世の容貌が彼を覆い隠すのをいつも残念に思った。

私はしばしば彼が円盤問題の主役として選抜されねばならなかった理由を考えた。彼は自分が教えを伝えるための宿命的な理由によって別な惑星から生まれかわって来たのだとみずから信じていた。この考えは全く妥当であると思う。彼はまた世界の偉人たちも惑星人とコンタクトし、同じ使命を与えられたのだけれども、種々の個人的な理由によってそれを拒んだかまたはうまくゆかなかったのだと考えていた。その選ばれた人々がとても出席できないと弁明したあとで王の宴会に招待された〝ちんば、びっこ、めくら〟として自分をみなしていた。彼は自分を一本の折れたアシ（注。植物）と感じていたが、ああ、しかしこれは喜んで〝彼ら〟の調べを歌おうとした唯一のアシである。それゆえ全力をつくし、立派な英語を書いたり話したりする力の無いことや、講演の困難さ、彼の本来の人となりのままにあろうとすることの生来の困難さなどにもかかわらず、精一杯にメッセージを伝えようとして非難や悪口にも屈することはなかったのである。

これはまことにもっともなことと思われる。惑星人の側で賢明な処置がとられたにしてもだ。一人の偉大な、尊敬に価する人物を選び出してそれを認めることはだれしも容易であろうが、落第して狂人のラク印を押されるかもしれないような人物が選出されるならば、本人がその妥当性を認めるのはきわめて困難であろう。再び言うと、ジョージ・アダムスキーの中にはこの地球のあらゆる徳性と欠点とが存在していた。それゆえ人は彼の中に自己の姿を認めることができようし、もっと個人的な基盤から判断することもできるだろう。

彼の体験の主張の妥当性を評価することは依然として困難である。個人的には私は彼の円盤写真や初期のコンタクトなどはまぎれもなく真実であり、いつか後続の事件類によって証明されるものと思い、心から満足している。彼の主張のなかには容易に信じられないものがあるにはある。しかし人が彼を夢想家として片付けることにしたとすると、彼の主張に妥当性を与えようとして何かが現われてくる。たとえば私が一九五四年に初めて彼を訪れたとき、彼はヴァンアレン帯や宇宙空間のホタル火について話してくれたが、これは後に宇宙飛行士によって目撃された。このいずれも当時は知られていなかったのである。最後に彼に会ったとき彼は静かに言った。「昨日法王のヨハネス二十三世に会ったよ」ところであいにくこれが真実だという確証を私は得ることができ

たのである。法王は自分の肖像を彫り込んだ美しい黄金のメダルを彼に与えたのだが、私の知る限りこれはまだ公開されたことはなく、最も特殊な人にだけ与えられるのである。ジョージは、公会議の運営に関する忠告の入った、惑星人から渡された封のした包みを法王に手渡したと言った。たしかにそれ以来教会のとってきた態度はきわめて惑星人の方針に沿っている。

ジョージに関する話としてはこれは不愉快なものだった。そして人が彼をついに大ホラ吹きときめつけたとたんに彼の主張を妥当だとする何かが現われるのである。

私がパロマーですごしていた日々の夜の二度の機会を思い出す。私は小さな黄金色の遠隔操作円盤が急速に離れて行くのを見たのだ。二度目のときは日没後まもなく内庭で話し合っていたのだが、そのとき私はだれかから観察されているという強烈な感じが起こってきた。あたりを見まわしたとたん、折しも一個の小さな黄金色の円盤がせいぜい五十フィート彼方を光の尾をひきながら矢のように上昇するのが見えた。ジョージは笑った。私は言った。「しめた。この二十分間われわれはワイ談はやらなかったぞ」

彼は私をコンタクトに連れて行くことを拒絶した。当時それは私をいらいらさせたが、後になって、そのような体験を持つのに私の精神状態は適していなかったことに気づいた。もし私が円盤に乗ったとしても、きわめてすぐれたコンタクティーになり得たかどうかは疑わしいのである。私の自我はしきりに自分を高慢にしたがるからだ。真実のコンタクトをした人々は妙な方向にそれてしまった。新しい宗教を始めたり、実際惑星人が全然望んでいないことを次々とやっている。私もその例に洩れなかったことだろう。

ジョージについて私が好きだったことは、彼がこの上なく徹底していたことである。彼は高慢さや、悪口、心身の過労、その他多くの物事に全く無とん着であったと思う。それどころか信奉者のあいだで紛争が生じてきても、あのような広大華麗な計画のなかにあっていつも大いなる謙虚さと自身の〝取るに足らぬ存在〟感とを有していた。

こんなことを述べても彼は私をとがめはしないだろう。彼はすばらしかった古い肉体を脱ぎ捨てたからだ。かつて彼は私に最も驚くべきバースマークを見せてくれたことがある。（注。バースマークとは出生時から肉体に印せられている特殊なアザまたは痕跡）それは彼のヘソだった。これこそ普通人のヘソとはまるで異なるものであった。それは太陽の形をした巨大な円盤型で、周囲に深く刻まれた光線状のスジを放ち、各スジが六インチもあって腰や股のあたりまで伸びていた。これが何を意味するのか私にはわからない。まさしく〝太陽の子〟のシルシだったのではないだろうか。

彼と知り合った人はだれも彼を心から敬愛するようになった。私と彼との最初の出合いは奇妙なものであった。二人の共著〝空飛ぶ円盤実見記〟の内、私が書いた部分はどの出版社からも刊行を拒絶されていた。その当時発生したジョージの砂漠における金星人との最初のコンタクトについて一週間後に私は一友人から聞いたのである。（注。この友人とは超心理学研究家のミード・レイン博士）そこでただちにジョージ宛に手紙を出して、彼が撮影した円盤写真を見せてもらいたいこと、できれば私の円盤の著書

に載せるためにそれを買いたいことなどを知らせてやった。すると彼は一組の円盤写真を送ってくれて、金はいらないからそれを使用してよろしいという返事を添えてよこしたのである。「何という並はずれた人間だろう」と私は思った。最大の価値ある写真を撮りながら金を要求しないのだ。後になって原稿を送ってくれて、出版社はいずれ見つかるだろうと謙虚に書き添えてあった。その頃までには親しかったウェイヴニー・ガーヴァン（注。元英国GAPリーダーで、後に〝空飛ぶ円盤評論〟誌の編集顧問になった。先般死去した）が私の原稿を認めてくれていて、もしこちらでジョージの写真や体験の大要を私の原稿中に使用しただけなら彼の原稿が生きないことになるだろうと心配していた。そして充分に吟味してから、共著にしてはどうかとすすめてきた。そこでその旨をジョージに通知したのだが、彼はこちらの手紙をまだ受け取らないのに打電してきた。「共著でよろし」ここで実にテレパシーが働いたのである！　こうして急速に関係が深まってきた。その後直接彼に会ったとき、まるで過去世において非常に親しかったかのように私たち二人は昔なじみの友達になっていた。彼の忠実な友で秘書のアリス・ウェルズも驚くべき婦人であった。彼女には別段何も尋ねる必要はなかった。本人がちゃんと心得ていたからだ。こちらの想念をキャッチして事前に回答してくれたのである。

かつてこの地球上で生きたことのある多数の発達した人々が、この苦難の時代に地球を援助するために円盤や生まれかわりなどによって地球へ帰って来つつあるとジョージは言っていた。ジョージもその人々の一人として、自称インテリや生意気な奴らや物知り顔をしたがる人間共を狼狽させるために選ばれたということは先ず間違いあるまい。これはちょうど、理性の力がまさって自身の精神という通路をふさいでしまった人々よりも、過去の偉大な予言者たちがきわめて純粋で謙虚な出生をしたがために真理を伝えるのによき乗物となったのと同様である。

われわれはジョージの逝去を惜しむ。心から惜しむのであるが、しかし私は彼の他界を悲しみはしない。彼は仕事に全力をつくした。世界は彼の他界によって変化するだろう。彼の出現は世界が豊かになることであり、去って行けば貧しくなるのだ。しかし私は彼が永遠に姿を消したのだとは信じない。別な惑星で生まれかわったならば再び地球へ帰って来てわれわれとコンタクトするつもりだと彼は生前に約束していた。

ジョージ・アダムスキーに関してはまた何かが起こるだろう。いや、いつも起こっているのだ。

さらば、なつかしい宇宙人ジョージよ、安らかに行きたまえ！

（八ページから）

で通過することになる。いうまでもなくこの場合流星説も除外しなければならない。

もちろん、右のような現象があったとすれば、それは流星以外の物だといわねばならない。ゆえに当局は、それの正体はかなり明白であるにもかかわらず、いかなる現象にもあてはまるようないい加減な説明をしているのである。

円盤対政府

アリス・K・ウェルズ

他の惑星から来る隣人たちは確実に彼らの言葉を守っています。当局が彼らの存在を認めるようになるまでは、大気圏内に彼らの宇宙船を増加させるつもりだと惑星人はアダムスキー氏に語りましたが、彼らはまさしくこのことを行なっています。現在のように一時にかくも多くの円盤目撃が発生したことはかつてないからです。米国各地や世界中から目撃報告が寄せられています。当局が大衆から真実を隠し通せるのもそう長続きはしないでしょう。

〈火星ロケット、マリナー四号について〉　これは発射計画において意図されたよりもオーソドックスの科学者にとってはるかに大きな効果をあげました。この打上げが宇宙空間の事情に無知なために行なわれたのか、それとも故意なのかはわかりません。とにかくオーソドックスの科学者や天文学者の言葉を真理だとみなしている人々にとって、マリナー四号は望ましい効果をあげたのです。（注。円盤・惑星人問題を抹殺するのに好都合な写真が撮れたの意）NBC放送の一解説者はマリナー四号の目的について、火星の表面からあれだけ離れた遠距離で鮮明な写真が撮れることをだれが期待できるだろうと述べ、あのテストの目的は未来の探険のための宇宙空間に関する多くの情報を得ることにすぎなかったとも言っています。

「生命が存在するかどうかを証明する惑星写真がついに撮れた」などと放言し、そのなかで最もボケたつまらぬ写真を発表して「あ、はァ！　だからこんな惑星に人間はいないとわれわれは言っていたじゃないか！」と大衆をバカにしてかかることはきわめて容易なのがこれでわかります。実に巧みな心理作戦ではありませんか。

殺到する円盤目撃報告のすべてを調査するということになれば空軍は多忙になるでしょう。たぶん空軍は弁解の限りをつくし、ついに折れて大衆に真相を発表するかもしれません。それともこれはただの希望的観測にすぎないことでしょうか。

七月二十八日の夜、九時から九時三十分までのあいだに、当地ヴィスタのGAP本部前庭から私たちはすばらしい目撃を体験しました。ジム・エンツミンガー（注。アダムスキーの助手だった人）が天体観測のために望遠鏡をすえつけて、まだそれをのぞかないうちに、金星の真下に一個の輝く光点に気づいたのです。当初は惑星だろうと思っていました。そこで星図を調べ始めたところ、その光点が動いていることに気づきました。それでマーサ（注。アダムスキーの秘書の一人であった人）と私に外へ出るようにと呼びかけましたので、出て見ますと、光点は急速に進行して大空を横切って地平線の彼方へ移動して行きました。するとそれは元の方向へ引き返し始めましたので、ジムが懐中電燈で信号を送りましたら、それは頭上の中空まで来て停止し、一段と輝きを増してから消えてゆきました。そのあとまもなく別な光点が出現したのを見ましたが、ジェット機群が現われて狂犬のように空中を暴れまわっていました。

〈宇宙飛行士、大気圏外で三個の不思議な物体を目撃したと語る〉

（この項のみジム・エンツミンガー記）

宇宙飛行士のジェイムズ・マクディヴィットとエドワード・ホワイトは、報導陣にでなく彼らの打上げの指導責任者に一体何を語ったか？　ここでも再び当局のごまかしが始まったのである。

大衆が円盤だと感違いしやすい物をあげてみよう。気象観測気球、金星、幻覚、幻日、氷の結晶、流星、火球、または昔なじみの地球製人工衛星などであろう。

さてこれを調べてみよう。ハーヴァード大学の天体物理学教授ドナルド・H・メンゼルでさえも、幻日、氷の結晶その他の現象を起こすには、かなりの量の空気、雲、水分を要すると語るだろう。（注。メンゼルは円盤の否定論者として有名）ところで宇宙飛行士の見た例の不思議な物体については、当局は、目撃が行なわれた位置の問題の物体はペガサス二号だったと言明したが、後になって、宇宙飛行士が目撃するほど当時それはあまり接近していなかったと断定した。しかしそれがソ連または米国の人工衛星であったとしても、そのスピードはジェミニのそれよりも遅かったかもしれない。もしそれが四十五ないし九十度の角度で接近していたとすれば、人工衛星を見たという可能性は除外してよいと思う。いま時速百マイルで道路を車で飛ばして十字路に近づいているとしよう。そして別な車が時速九十八マイルで右方から同じ十字路に近づいているとする。二人とも或る地点から十字路まで同じ距離にある。そうすると十字路を横切るときに互いによく見ることができるだろうか。この比較は大気圏外で発生した事件を説明するために用いられたにすぎない。ただ大気圏外では時速一万五千マイルから一万七千マイルにも及ぶだろう。

宇宙飛行士が撮影した写真が現像された後、ハワイ上空で目撃されたその物体はフィルムに現われなかったと発表されたが、これは物体のスピードが早すぎてマクディヴィットがうまくシャッターを切れなかったためだと言明された。ところがその直後当局は光の尾を持った一個の白い光点と扇状の光る物がフィルムに現われたと言ったのである。思うにこれは百八十度の広角レンズを付けたカメラが物体を捕えないはずはないとだれかが言い出したために現像が強化されたものだろう。ところでそれが人工衛星だとすれば、光の尾を持っていたというのはどうしたわけだろう。明らかに空気との摩擦はなかったのに―。

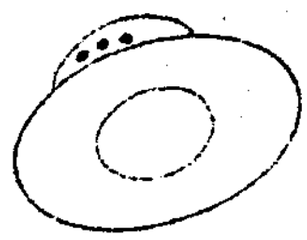
するとそれが金星の見誤りだという説はどうか。マクディヴィットは彼が最初にハワイ上空で見た物体は円筒形だったと言っている。たぶん記憶のゆがみかちょっとした幻覚によってどれかの惑星が円筒形に見えることもあるかもしれない。気象観測用気球はどうだろう。時速一万七千マイルで飛ぶ気球に出会った人がいるだろうか。

種々の可能性を考えてみると結局残るのは流星か火球である。問題の物体は光の尾を持った白い光点だといわれているが、これはいかにも流星または火球のように見える。しかし私の天文学書で調べてみると、多少とも大気のある百キロないし百六十一キロの高度では流星も光って光の尾を放つと述べてある。だが問題の物体がこれをやるとすれば時速約九万マイルの速度を要することになるだろう。

そこで、流星が時速一万七千マイルのジェミニと同じ方向に進行しつつあったとすれば、それは時速七万三千マイルのスピード

（六ページへ続く）

最近の 円盤情報



C・A・ハニー

◎円盤の着陸事件の増加が連日のように報導されています。この号（注。ハニー発行の機関誌今年八月号）の九ページにはロサンジェルス・タイムズ紙に掲載された私（ハニー）に関する記事が掲載されています。そこに出ている写真は数ヵ月前に撮影されたもので、この記事は私にとって全く思いがけない驚きでした。最大の驚きは、円盤問題に関して冷笑のカケラもないまじめな記事であるという点です。これはかなり有利な宣伝にもなります。（注。ハニーの写真と共に〝アナハイムの宇宙工学技師、円盤研究のトップをゆく〟と題するロサンジェルス・タイムズ紙の記事を掲載している。詳細は本誌15ページに転載）

◎大衆を愚弄しようといういつもの試みはマリナーの火星写真に関しても始まりました。マリナーの発射前にあらゆる新聞は真実を報導していました。すなわち写真は非常な遠距離から撮影されるので、ニューヨークのような大都市があったとしても識別できないだろうというわけです。地球の上空六百マイルあたりから地球を撮影しても生命の存在を確認できません。しかるに今や新聞は火星は死の惑星であると報導しています。

私はマリナー四号によって用いられたのと同じ方法で、八千ないし一万マイルの高度から撮影した地球の写真を見たいと思います。この場合もおそらく科学者は低空からは見えない巨大なクレイター（穴）を見出すでしょう。

私は予言しましょう。火星には約十億の人間がいて都市も存在すると。一九六五年の秋が来る頃には円盤の着陸事件が定期的に発生するでしょう。今年の終り頃は多くの異常な地震活動や気象異変が起こるでしょう。加うるに、政府内でふざけまわることはもうやめて円盤問題の背後にある真相について大衆へ知らせる運動が展開すべき時機が来ていると思います。仕方なしにやるよりも積極的に何かをやるほうがよいのです。

◎私は依然としてヒューズ宇宙センターで週六十時間勤務の仕事についています。そのために郵便物の返事が出せず、機関誌発行も遅れています。この状態はしばらく続くでしょうが、できるだけ努力するつもりです。

◎以下の記事はニュージーランドの同志ヘンク及びブレンダ・ヒンフェラール夫妻の機関誌〝スペイス・ヴュー〟一九六五年七月・八月号からの転載です。

「―マリナー四号は火星人に導かれたか？―

一九六五年七月十六日付のシドニー・モーニング・ヘラルド紙は次のような大見出しを付けた。

〝マリナー四号と火星の謎〟

宇宙空間へ七ヵ月半の旅を続けた後、マリナー四号は昨日火星が予想よりもおそらくかなり異なる状態にあることを発見した。五億二千万キロの旅で初めてこのロケットは予測し得ない行動をとった。すなわち火星のそばを通過したときスピードを落としたのである。

「マリナー四号が惑星の背後へ行ったときの失われた数分間の神秘！

マリナーの二十一枚の写真がうまく電送されるかどうかはわれわれにはまだわからない。しかしその写真類が何を示そうとも、火星の表面にはたしかに何か奇妙なことがあるのである。より濃密な大気か、より大なる重力がマリナーの速度を落としたのか、とにかくマリナーは火星の地平線の彼方へ没するのに予定の計算よりも七分十二、四秒よけいにかかったのだ。そしてマリナー四号はその赤い惑星の背後から出現するのに八分以上も遅れたのである。

十一月にケイプ・ケネディーから打ち上げられて以来、マリナー四号は厳密なスケジュールに乗った。この厳密なスケジュールに従って午後十二時二十四分にオーストラリアのティドビンビラ観測所はマリナーが五十一分三十二秒間火星の背後を通過したときにマリナーの信号を失ってしまった。ところが、時速一万一千五百マイルの速度から何物かがそのロケットを遅らせたのである。

この興味ある情報はタイム誌が報じたのでもなければ、他の新聞関係のいずれに出たのでもない。しかしタイム誌は、ケァリフォーニア州ゴールドストン追跡ステイシュンがマリナーのテープレコーダーはスウィッチが入れられ、スケジュール通りに作動していると発表した直後に妨害電波が入り始めてジェット推進研究所が仰天した模様を伝えている。驚いたことに同研究所の科学者団はレコーダーの停止機構に何か故障が起きたらしいことを発見した。数時間はだれも何が起こったのかわからなかった。と同時にオーストラリアではキャンベラから二十六マイル離れたティドビンビラ観測所は、マリナー四号から来る信号の中にわけのわからぬ変な信号が現われ始めたことを知った。

さて、以下はその話の最も興味ある部分である！ ケァリフォーニア州ゴールドストン観測所と（七月十四日午後五時半から六時まで）、オーストラリアのティドビンビラで（七月十五日午前十一時から十一時三十分まで）キャッチした信号がおかしくなってきたまさにそのとき、一個の不思議な光る物体がキャンベラ上空に停止していたのである！ 午前十時五十分に最初にそれを目撃したのはキャンベラ空港の管制塔の六名であった。彼らは四十分間もそれを見続けたという。その高度は五千フィートと思われた。その神秘的な物体は商業機の二名のパイロット、フェアパーンの空軍基地の数名の要員、その他多くの民間人にも目撃されたので、空港の交換台には電話の照会が殺到し、回答係として特別に一人の男が配置されたほどだった。オーストラリア空軍の一上級将校は言った。「これは空飛ぶ円盤かもしれない。しかしお願いだから私の名を秘してくれ。笑いものになるからね」空軍は調査のため飛行機を飛ばしたが、物体は上昇して逃げてしまった」

ドナルド・メンゼル博士でさえも（注。メンゼルは円盤否定論者として有名な学者）空港の管制塔の要員が専門の観測員であることを認めるだろうが、彼ら要員たちはそれまでそのような物を

見た経験はないという。ストロムロ山天文台の天文学者T・ミラー氏もそんな物を見た経験のない人だが、彼もその物体に関する無数の報告を受け取ったと述べた。天文学的には説明がつかないという。とても観測気球などではない。なぜならあまりに長時間停止していたからだ。彼は次のように結論づけている。〈おそらく別な惑星から来た物体であったかもしれない〉—ああ、これは純粋な天文学者の口から出た言葉だ！

この目撃事件はオーストラリアとニュージーランドの各新聞がかなり知るところとなった。そのうちブリスベインのクーリエ・メイル紙だけは七月十六日付で、キャンベラの観測所で受信されたマリナー四号の信号中に不可解な干渉が入ったあいだにその目撃事件が発生したことを指摘している。同紙の記事は次の見出しのもとに出ている。〝空飛ぶ円盤の神秘と何かの関連があるのか？〟

その後数日間続いた新聞の記事によれば、あらゆるありふれた説明は除外された。これは目撃者が信用できることと、物体が四十分間も停止していたという事実のためである。それを説明しようとする唯一の弱い試みはブリスベインの七月三十日付テレグラフ紙に現われた。同紙のまん中に押し込まれた小さな記事は次のとおりである。

〈七月十五日にキャンベラ付近の空中に見られた未確認飛行体は大きな気象観測気球であったことが判明した。空軍の調査団は物体が侵入機であったという見込みを捨てたと信じられている〉

一体だれによって〝判明した〟のか、だれによって〝信じられている〟のか？ たしかにわれわれは何の意味もないこの種のパカげた〝たわこと〟には慣れている。まさかキャンベラ空港管制塔の要員たちによって〝判明した〟のでもなければ〝信じられている〟のでもあるまい。右の記事が正しいとすればこの要員たちは無能のゆえに文句なしにクビになっていることだろう。

ゆえに、ちゃんと確証されたUFOがキャンベラの上空でそれ自身の不可解な仕事をしていたのであって、一方小さなマリナー四号は勇敢に赤い惑星の秘密を探索しようとして多少とも写真を撮ったのである。

加うるにわれわれはきわめて信頼すべき権威筋から、米国の或る主要宇宙センターで働く科学者のなかには右のキャンベラのUFOは信号の受信を極力隠ぺいしようとした火星の宇宙船であったという意見を持っている者がいると聞いている。われわれはこの紳士たちと争う考えは少しもない！ ジェット推進研究所のウィリアム・ピカリング博士でさえも、はるかに近距離から撮影されたタイロス衛星の地球の写真が地球上には生命が存在するシルシはないことを示した事実を公表するのに頭を悩ましているのである。結局、第一回戦は火星人側の勝というものだ」

◎最近のビッグ・ニューズはアナハイム付近で撮影された円盤の写真で、この三枚が地方紙に掲載されたものを記事と共に当方の（ハニーの）機関紙に転載しました。（注。道路調査官レックス・ヘフリンが撮影した円盤写真。この内一枚を本号の13ページに掲載）

◎目下メキシコ、オーストラリア、南米、アフリカなどでUFOの活動がきわめて激しく行なわれており、また多くの新しいコンタクトが報導されています。その一例としてはメキシコの事件が

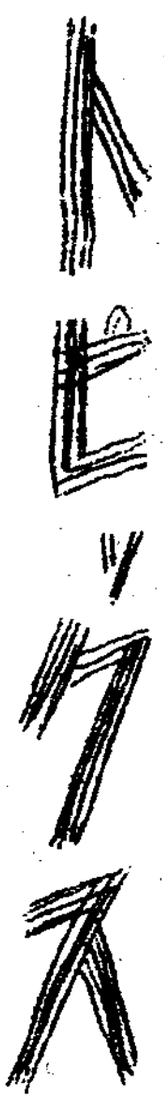
それです。（注。詳細は省略）これはまさに一九六六年が近づくにつれて発生しようとしている物事の始まりです。

◎読者のほとんどは新聞、ラジオ、テレビなどがUFO問題についてはるかに解放的になったことをご存知でしょう。（注。これは米国での話。日本はまだダメ）物事が楽になってきたことは明らかです。この傾向が続くならば私が予測したよりも数年早く政府は公式なUFO情報を発表するかもしれません。

◎一九六五年九月十日付のロンドン、デイリー・ミラー紙は円盤の写真を一ページ全部に載せていますが、これは多数の信頼し得る人々から目撃が報告されたもので、種々の珍しい現象をひき起こしました。その写真はボケていてあまり良くありませんが、基本的な円盤の形が中央に現われています。

◎米国の或る高官から出たといわれる情報が流れていますが、それによるとソ連が撮影した月の裏側の写真のうち、未公開のものに人工の建造物やその他人間が居住していることを証明する物などが写っているということです。またソ連はすでに二人の宇宙飛行士を月の裏側に着陸させて秘密裏に探険をやっているとも伝えられています。これが真実だとしてもかかる出来事は米ソ両国政府のトップ・シークレット（極秘）事項でしょうから、この情報の真偽に関してはいずれ時が解決するでしょう。

多数の国の科学者は密接な協力のもとに或る種の宇宙計画に従事しており、知識は自由に交換されていますが、内容はすべて極秘にされています。



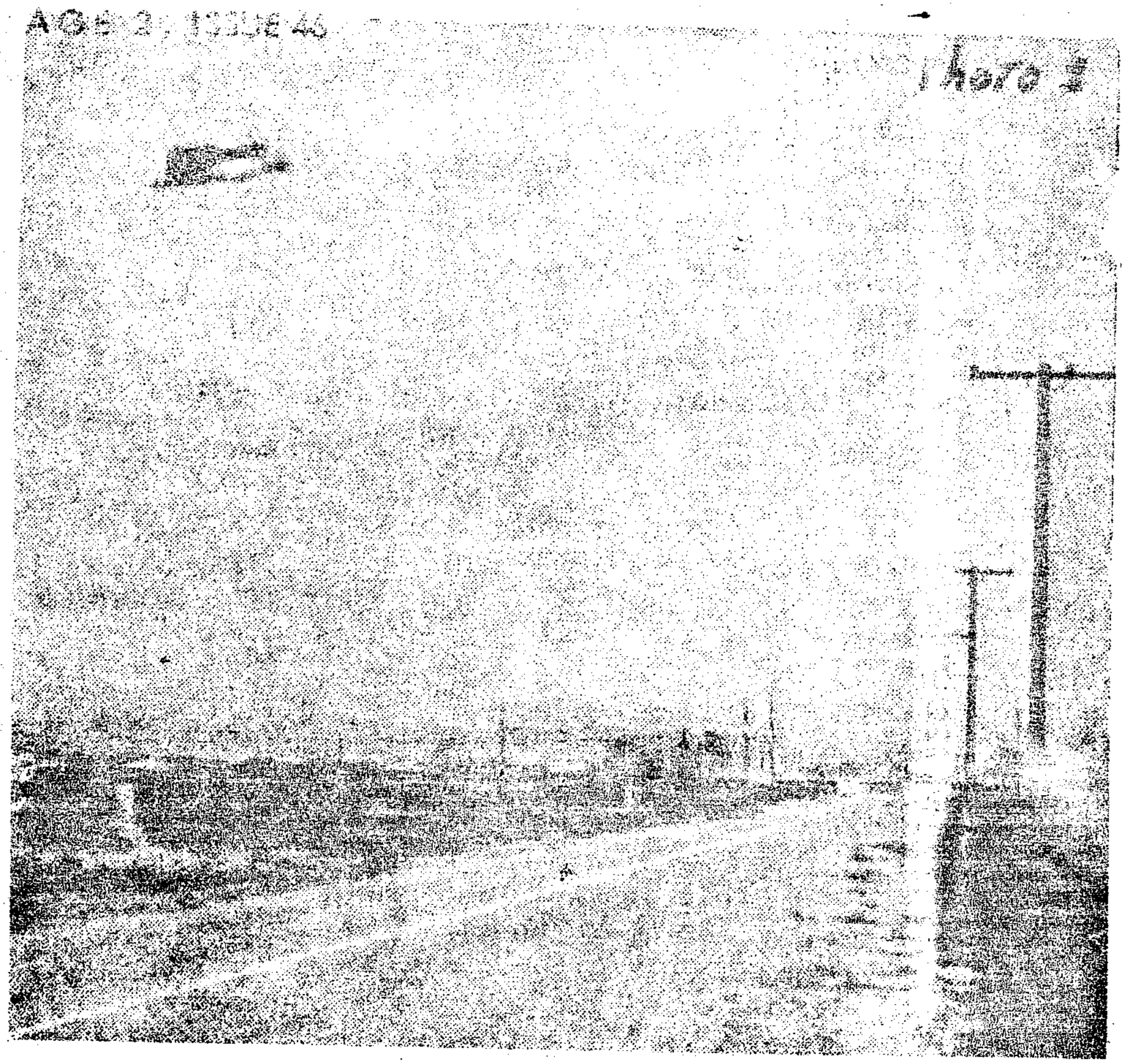
郡官吏がアーヴィン上空の円盤を撮影

レックス・ヘフリンは円盤の存在を信じないし、今までも信じていなかった。しかし彼は円盤型の物体を撮影したが、これはやはり円盤とみなさないわけにはゆかない。疑う人は彼の写真はトリックによるもので、でっちあげだというかもしれないが、ヘフリンはその真実性を証明するためにいつでもウソ発見器のテストを受ける用意をしている。

郡の道路調査官である三十七才のヘフリンは、サンタアナ・フリーウェイとヴァレンシア間のマイフォード路上で働いていた。そのとき円形の銀色の物体に気づいたのである。その物体の直径は三十フィートで厚さは八フィートあったとみている。約十五秒間見えたという。西から東へかけて音もなく進行し、続いてサドルバックへ向かって〝ジェット機と同じくらいのスピード〟に加速した。そのとき聞こえた唯一の音はサンタアナ海兵隊基地のヘリコプター群の音だけだった。

その円盤の下部には白色光が回転していた。（虫メガネで見ると、写真の一枚にはその白色光が見られる）その神秘的な物体が海兵隊基地に接近したにもかかわらず、レーダーはその日（八月三日）の物体をキャッチしていない。

いわゆる空飛ぶ円盤は地球以外の世界から来るものだというこ



ヘフリンが撮影した円盤

とをヘフリンは信じていない。彼は米国が新しい航空機を開発しているのだと考えている。「いずれ米国製の円盤が町の付近に墜落するよ」といってきかない。「私は円盤の墜落事件をまだ聞いたことがない。円盤は長いこと一般に目撃されてきた」

円盤が接近したとき彼は車中で無線機によって上司と連絡しようとしたが、無線機は作動しなかった。円盤が去って後は機械も元通りになり、いまも健在である。

この調査官は最初円盤に注意を払わなかった。ジェット機かと思ったという。仕事用に車中にカメラを置いているヘフリンは再度見上げてそれがジェット機でないことに気づいた。そこでカメラをつかんで円盤が地平線の彼方に消えるまでに三枚の写真を撮った。ヘフリンはその写真を或る雑誌の編集者へ送ったが、論議の余地があるといって送り返してきた。しかしその写真は編集者の見た円盤写真のなかでは最上のものだとつけ加えてあった。ヘフリンは米国中が円盤の目撃報告で溢れている最中に撮ったのである。

UFOの多くの報導は八月一日にテキサス、ニューメキシコ、オクラホマ、キャンザスの各州から出ている。（プレティン紙九月二十日付）

国防省、ヘフリンの事件を口止めす

レックス・ヘフリンがオレンジ郡で撮影した円盤についてもっと何かを言わねばならぬとすれば、それは国防省だけに洩らされるだろう。ヘフリンから聞きただそうとしても黙して語らぬだろう。彼の義兄ビル・フィンチャーは、官憲は彼に円盤や写真のことについてはしゃべるなと命じたと言っている。

KABCテレビのニュース解説者バクスター・ウォードも官憲はヘフリンに口止めをしたと述べた。ウォードによればヘフリンは北米空軍防衛司令部とボーイング航空機会社の両方から調べられたという。司令部のコロラドスプリングズ本部の公務部にいるデイル・キンチーは言った。「ヘフリン氏に会った者は防衛司令部にはいない。これはふつうわれわれの仕事ではない」国防省の空軍情報将校D・R・ディンスモアー大佐は言った。「ヘフリンが国防省の要人から調べられたという確証はないが、調べられたとすればそれは正当な手続きである」

ヘフリンが言うところによれば、陸軍の代表者が彼の写真を没収して、例の事件に関しては新聞社にこれ以上しゃべるなと命じたという。「調査の方法の一部として、われわれは常に写真を要求する。それは押収するのではない。結局は所有者に返す。事件について新聞社へしゃべるなと命じるようなことはしない」とディンスモアー大佐は述べた。

あらゆるUFO目撃事件はオハイオ州デイトンのライトパタスン空軍基地に本拠を置く或る一団によって〝徹底的に調査されている〟と大佐は説明した。彼は付言した。「空軍の要員がヘフリンを調べたとすれば、それはまずライトパタスン基地の者で、防衛司令部ではないだろう。これはあとで調査してみるつもりだ」

一方シアトルのボーイング航空機会社のスポークスマンは「これは全く耳新しいことだ。社の者がヘフリンを調べたかどうかは調査してみよう」

ヘフリンの円盤写真は月曜日にレジスター紙に掲載され、これは他の新聞雑誌が急速に注目するところとなった。写真が公表されてからは郡役所の交換台には電話の照会が殺到している。道路課の交換台には、今朝写真が公表されて最初の一時間に約二十回の電話がかかってきたという。

ヘフリンはサンタアナ海兵隊基地付近の畑の上空約百五十フィートあたりに滞空している円盤を見つけた。そのとき彼は物体から約二百メートルのところにいた。（レジスター紙九月二十一日付）

アナハイムの宇宙工学技師、円盤研究のトップをゆく

ジェミニ衛星船がこの世界から脱出する方法の知識を人間に高めているあいだにも、宇宙のだれかは地球上の活動社会に入り込む方法を求めてわれわれを見おろしていたかもしれない。

以上はアナハイムのC・A・ハニーの意見で、自宅の小さな事

務室には世界中で発生したUFOの報告や写真類が流れ込んで来る。関する報告類はサイエンス・パブリケイシュンズと題する機関誌に掲載されて世界中に送られる。

ハニーはカルヴァー市付近のヒューズ航空機会社の宇宙工学技師である。彼は十五年間UFOの記録をやってきた。最近UFOの熱心な研究家であるジョージ・アダムスキーが死んでから、多数の人によってハニーこそ円盤・宇宙人問題の最高研究家とみなされている。彼はUFO目撃事件の調査には慎重である。円盤に

「円盤・宇宙人問題の報告類の約九十五パーセントは全くのでたらめだ」と、手紙や資料や機関誌の既刊号などで埋まった彼の事務室でインタヴューした際に彼はこう言った。「私が関心を持つ報告類は残る五パーセントです」

ハニーは三月に予言したが、それによると今年は円盤目撃報告が増加し、殺到する手紙類はUFOの支持者や目撃者が大きく増加することを意味するだろうという。彼は六月二十八日に宇宙人問題についてヴァリーヒルズで講演することになっている。ただし現代の宇宙人問題ではなく、六千年ないし一万二千年前の宇宙人問題である。「サハラの山岳地帯のその時代の洞窟の絵画は、鹿を追う狩人を示しているが、その絵のなかには宇宙服を着た人間がいる。これと同時代のシナの文献には〝空から降りてシナを訪問して来た人々〟の物語があるし、同時に日本には飛ぶ機械や不思議な人々にわれわれの注意を引くUFO人の記録文書がある。（注。何を意味するのかよくわからない）

講演や著作において彼は、世界各国の指導者は大気圏外から来る人間によって地球上の探険が行なわれている事実を知っていい

（二十一ページへ続く）

C・A・ハニー氏

質疑応答

C・A・ハニー

問　あなたは心霊研究を無視されますが、あなたの言うソウルマインドなるものの物質的性質をどのように説明しますか。またこのソウルマインドは肉体中のどこにあるのですか。エドガー・ケイシーのリーディングや資料は心霊研究界で利用されていますが、しかるにあなたはケイシーに関する書物や資料を取り次いでいます。（注。ハニーは資金かせぎのために多数の図書の取次通信販売をやっている。注文を受けた書籍は発送する前に自分が先ず読むことにしているが、一度読んだらその内容を忘れぬという）おそらくあなたは自分で考えるよりももっと心霊研究界に近づいているのではありませんか。

答　この質問はちょっとした驚きです。こんな問にたいする回答は多くの記事できわめてはっきりと書いてきたからです。新しい読者のためにここで簡単に述べましょう。

最初の質問にたいしてはかつて書いた〝センスマインドとソウルマインド〟と題する記事をお読みになればわかります。（注。本誌一九六三年七月・八月号に訳文を掲載）

質問のあとの部分はここで答えましょう。今日いたる所で少なくとも十三種類の誤った考え方が行なわれています。この一つは〝連想による誤り〟で、他は〝速断〟です。或る心霊研究家によって利用される書物を私が取り次ぐという事実は、その心霊研究家が私を支持するというのでもなければ、私がその人を支持するというのでもありません。こうした連想や速断の誤りは次に一例をあげて説明できますし、またこれは大国の指導者にたいする信頼の念を破壊しようとする極右の過激派によって用いられる誤った考え方です。（注。ただしこれは米国での話）

かりにジョン・ドウという人が共産主義者でバラライカ（注。ロシアの民族楽器）を好むとします。ところがジョン・ドウとは関係のないジェイン・ドウという女性もバラライカを好むとします。そこでジェインも共産主義者か少なくともシンパ（支持者）であると考える人がいるかもしれません。しかし彼女は政治問題とは一切関係がないのです。

私は〝霊的であること〟はよいことだと何度も述べました。イエスをも含めて過去の偉大な指導者はきわめて霊的でしたが、これは私が「従わないほうがよい」と警告してきたいわゆる心霊研究とは何の関係もありません。単なる文脈から何かを読み取ろうとしたり、他人の述べた言葉をあなた自身の考えと解釈しても得るところはありません。

問　他の惑星から来た人間が地球上に着陸するのを安全にするにはどうすればよいですか。

答　地球の人間の性質を変えることです。イエスが地球へ来たときに何が起こったかを考えてごらんなさい。今日多くの都市で黒人が街路を歩いたり学校へ通ったりするのは安全ではありません。もし円盤がアラバマ州かミシシピ州あたりに着陸して、官憲がその乗員を迎えようと走り寄ったとき、出てきた七フィートもある大男の惑星人が黒人であったとすれば、一体どうなるでしょう？

この惑星人はいつまで生きられると思いますか。現在米国の南北諸州にこんな惑星人が着陸して平気で地上を歩けるようなチャンスを持つとは考えられません。

問　倍率二十倍の望遠鏡で星を観測していたら、その大部分は空中をジグザグに動きました。この理由を説明して下さい。

答　これは熱い上昇気流によって起こるごくふつうの現象で、地平線付近でよく起こります。異なる気圧で上昇する空気は星の光にたいして可変的なレンズの役割を果たします。望遠鏡でながめると見かけ上の運動は肉眼よりもうんと大きくなります。多くの人はこの見かけ上の運動を飛行中のUFOと見誤りますが、実際こまう学的な幻覚でそう見えるだけです。

問　友人のなかにはイエスは宇宙船で別な惑星から来たのであって、その誕生の物語は作り事であると考えている者がいます。しかしイエスはやはり通常の誕生を経て、バイブルに出てこない謎の時代に他の惑星人とコンタクトしたのではないでしょうか。

答　地球上の記録や証拠などによっては彼が宇宙船で来たのか、それとも地球で生まれたのかはだれにもわかりません。地球で生まれたとすれば、それはわれわれと同様に通常の誕生であったはずです。一体に当時は偉人や偉大な指導者というものは神から創造されただの処女の母親から生まれたというふうに言われたものなのです。シーザーやアレクサンダー大王なども同じことが言われました。

イエスが高級な惑星から肉体のまま宇宙船で来ようが、霊魂のままやって来て生まれかわろうが、さほどの相違はありません。肉体は真の本体の宿る家にすぎないからです。われわれUFO研究をやってきた者は、イエスは金星人の考え方を伝えることによって地球人を救うために金星から地球へ派遣されたのであることを知っています。これについてはアダムスキー氏の〝空飛ぶ円盤同乗記〟を参照して下さい。

イエス自身は次のように言っています。（ヨハネによる福音書第八章二十三）「あなたがたはこの世の者であるが、わたしはこの世の者ではない」また別な個所では天空の彼方の惑星から来た人間は地球人によく似ているので見分けがつかないと述べてあります。（ヘブル人への手紙第十三章二）「旅人をもてなすことを忘れてはならない。このようにして、ある人々は、気づかないで御使いたちをもてなした」旧約聖書に出てくる天使たちは、ちょうど今日やっているように他の惑星から来た人々でした。

これと全く同じことが現代も起こっています。金星、火星、土星等の他の惑星から人間が地球へ来つつあって、地球人のなかに混じって住んでいます。このことは〝空飛ぶ円盤同乗記〟中に次のように述べてあります。

「この人たちは使命を果たすために注意深く訓練されていて、個人の安全に関する教育を受けています。本人の正体は、一定の目的のためにごく少数の地球人以外には絶対に洩らしません。あなたはその少数のうちの一人です。

彼等は地球の兄弟たちにまじって言語や生活様式などを学びますが、やがて故郷の遊星に帰って地球で得た知識を伝えてくれます」

南極の円盤騒動

ダン・ロイド

デイリー・エクスプレスの読者は同紙一九六五年七月七日付の第一面に掲載された短いニュースに驚いたことと思う。その記事は次のとおりである。

「英国、アルジェンティン、チリーの南極探険隊は、昨日約二十分間にわたって不思議な物体が上空に出現したのを観測した。チリー空軍はそれが〝白色で輝いていた〟と言明している。英国基地はそれがジグザグの行動をし、黄色から緑色に変化したと述べている」

エクスプレス紙は〝空飛ぶ円盤〟という語を使用することを注意深く避けた。〝上空に現われた不思議な物体〟で〝ジグザグに動いた空中の神秘〟と書いている。しかし二日後にデイリー・メイル紙の〝南極に幽霊のような物体が飛ぶ〟と題する記事に目を走らせていた読者は、この神秘的事件について更に妙な事を発見した。「この物体が目撃されたのは十八日間にこれが二度目である」というチリー国防省の言明が引用されていたからである。そして基地司令の一人はわれわれがみな円盤を見たというわけではないと否定しながらも次のように語っている。「しかしそれは実在するものだったし、驚くべきスピードで動き、急速に行動して、青緑色の光輝を放っていた。またわれわれの基地に直面しているアルジェンティン側の一基地の電磁装置に影響を及ぼした」デイリー・メイル紙の記事は続く。チリー側の一伍長はその物体を撮影したが、八ヶ月たって隊が本国へ帰るまでそのカラーフィルムは現像できないという。

ところで更に興味深い事柄があった。メイル紙の副主筆にはそれが〝幽霊のような物体〟だったかもしれないが、明敏な読者が、実在した物体がなぜ〝幽霊〟とされるのかと尋ねても失礼にはなるまい。一体いかなる種類の〝幽霊〟が電磁装置に影響を与えることができるだろう？　これまで〝不気味な空中の物体〟が自動車の伝導装置、テレビ、ラジオ、その他類似の電気装置に影響を与えた事件や、高速で自由自在に行動する光る物体が目にもとまらぬ早業を演じて目撃者を当惑させた無数の事件についてメイル紙の副主筆が知っていたならば、幽霊だときめてかかる前にちょっと考えたことだろう。

右の謎の事件については最近更に詳細な情報が入っている。読者のサラ・マクスウェルからはチリー、バルパライソの〝エル・メルクリオ〟紙の一九六五年七月七日付の切抜きが送ってきたし、ブラジルの〝空飛ぶ円盤〟誌通信員ニゲル・リメスからは一九六五年七月八日付のオ・エスタド・デ・サオパウロ紙の切抜きが来た。飽くことを知らないゴードン・クレイトンがそれらを翻訳してみると、南極の空中の不思議な事件について更に明確な様子がわかってきた。

右の二紙の記事がこの事件を最もよく伝えているが、先ずオ・エスタド・デ・サオパウロ紙によれば次のとおりである。

「空飛ぶ円盤について史上初めて政府による公式なコミュニケが発表された。それはアルジェンティン海軍の記録文書であって、

南極の海軍基地に駐屯しているアルジェンティン、チリー、英国などの多数の水兵の談話に基づくものである」

そのコミュニケは次のように伝えている。「ディセプシュンアイランド海軍基地の要員は七月三日の十九時四十分にレンズ状の飛ぶ物体を見たが、それは固体のように見え、色は赤から緑に変わり、まもなく黄色に変化した。その物はジグザグで飛び、大体に西方へ向かっていたが、数度コースを変えスピードも変えた。水平線上約四十五度の角度を保っていた。また約二十分間約五千メートルの高度で停止したが音はなかった」

コミュニケは更に、その物体が観察された当時、一年間のその時期に南極は流星の活動がきわめてさかんであったことも考えられると述べている。当日空は澄んでいて沢山の星が見えた。

アルジェンティン海軍のスポークスマンはコミュニケで次のように語っている。その物体は三個所の海軍基地の科学者によって目撃されたし、この人々の言っている事実は完全に一致している。この基地の一つで一カメラマンによって撮影された写真は、科学者によって分析された後に公開されるものと考えられている。

エル・メルクリオ紙は、チリー空軍南極基地の隊長、ドン・マリオ・ホアン・バルレラの談話を通じてこの物語を取り上げている。

「空想科学小説に出てくるような空飛ぶ円盤をみんなが見たというのは早計であるが、しかしやはりその物は現実の何物かで、驚くべきスピードで進行する物体であり、種々の離れ業を演じて、青緑色の光を放った。そしてわれわれの基地の真向かいにある付近の島のアルジェンティン基地の諸装置に故障を生ぜしめた。このんな空中の物体をわれわれが見たのは一ヵ月もたたないうちにこれが二度目である。最初は六月十八日で、ついでこの土曜日の十九時二十分に目撃したのであった。基地の全員が物体を見たのはあとの機会であって、当時一同は気象観測の日課仕事に従事していた」

次の点は司令のバルレラが強調したもので、これを彼は最重要なポイントと考えている。

「ウラディスラオ・ドゥラン・マルティネス伍長はすぐに自分のカメラを取り出して約十枚の写真を撮ったが、写真に関する彼の体験からかんがみて、それらはまず間違いないものである。彼は写真を撮ったのみならず、経緯儀と高倍率の双眼鏡を用いて更に詳細な光景を目撃した。不幸にしてわれわれはカラーフィルムを現像する設備を基地に持たないので、本国へ帰還する来年三月まで現像を待つ必要がある。そのときこそこの事件のもっと完全な研究を行なうことができるだろう」

あなたが見たものは個人的に言って空飛ぶ円盤だったかと尋ねられて、バルレラ隊長は次のように強調した。

「その件について意見を述べるのはきわめて早計だが、われわれが見た物は幻覚や集団精神異常の産物ではない。われわれは科学的な目的のためにこの基地にいる。それでわれわれが見る物についてはこの見地から分析しようとする。しかしその物体は星ではなかったと言える。きわめて急速な絶え間のない運動を続けたからである。私に言わせればそれは正体不明の天空の物体である。あるいは地上で建造された航空機であったかもしれないが、私にはそうとは思えない。私は空軍に属する。それで私の知識によれ

ば、人間の手によって建造された航空機類は形、スピード、空中での機動性などに関して右の物体にはるかに及ばない」

アルジェンティン基地のダニエル・ペリス隊長は、ディセプシュン島の基地の要員が目撃した円盤の出現状況は幻覚やもう想ではないと言明して、チリーの仲間たちを支援した。物体の行動に関する彼の言明の内容はバルレラ隊長のそれと正確に一致している。

彼の基地の要員全部がその物体を見たのだが、部署についていた無線技師だけは別だった。彼はヴァリオメーターに、物体によって残された磁気的な航跡を記録することができた。ペリス隊長が証言として述べたところによると、この技師は単独でこの磁気テープに頼っていた。これは物体との長い距離や弱い光にかんがみて、撮影される写真にはたいして価値はないだろうと考えたためである。

写真に慣値があろうがあるまいが、一九五六年にあった出来事を心にとどめるのもわるくはないだろう。チリー海軍のアウグスト・ヴァルス・オルテガ隊長によって一九五〇年の春に南極で撮影されたUFOの千二百フィートに及ぶカラーフィルムについて、NICAP（米国空中現象調査委員会）がチリー政府に照会したところ、チリー政府は、そのフィルムは分類されたので入手不可能だとキーホー少佐に語ったのである。歴史はくり返すかどうかを見るのは興味あることだ。UFOについてうまく釈明し得ないかぎり、官僚はそれについて何も洩らしはしないだろう。前記の磁気テープについては何らかの釈明がなされるだろう。

しかし、その電磁装置の常軌を逸した振舞いを釈明しようという試みが、フォークランド諸島の英国南極探険隊本部のあるスタンリーからとどいている。七月十二日付でケインブリッジのスコット極地研究所へ送られた次の電文はヴィヴァン・フュース卿が創作したものだろうか。

「現在ディセプシュン島は次のように報じている。『アルジェンティン基地は六月七日、二十日及び七月三日に一個の動く色光体を観測す。チリー基地も七日及び七月三日に類似の観測をす。七月二日夜十一時には英国基地より真北に、明滅する赤、緑、黄色の光体（複数）が観察されり。それは西から二回にわたり波状的に進行し、少々このコースに沿って逆転してより北へ引き返し、そこで約二十分間静止せり』アルジェンティン側は二日に目撃された真珠状の色光体について、七月四日ストニントン・ホースシューへ無電で報告した。このとき磁気装置は故障を起こしたので、この情報は一般ニューズ交換により伝えられたもののように思われる。聴取者はこれを聴いて二つの光点が実在したかの如く思ったであろう。装置の故障は、普通の厳寒調整の最中にヴァリオメーターの偶発的な妨害によるもので、復旧するまでに二日を要した」

〝ヴァリオメーターの偶発的な妨害〟がUFOの出現と一致していたということになれば、これは驚くべき一致である。こうなれば磁気テープの記録も不完全なメカニズムのせいであったのだろう。おそらく南極基地の全員が同時に精神錯誤を起こしたのだろう。また、カメラが何かを写しているとすれば、それはメカニズムの欠陥のためだろう。

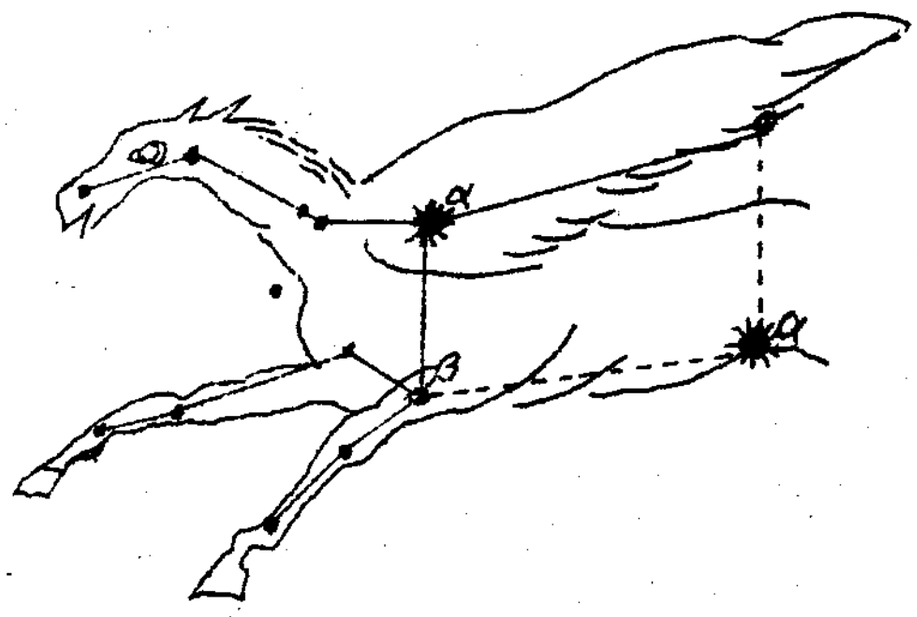
正気も何もあったものではない。

一十五ページより）ると強調する。「ただし指導者たちはすべての事実を知っているわけではない。現代の宇宙開発産業のほとんどには地球以外の世界から来た人間が潜入している。そうでなければこんな短期間に宇宙開発技術において人間がなしとげた大飛躍について他に説明がつかない。このUFO活動を知っている重要な地位の人々は率直にそのことを語ろうとはしないが、これは真相が公表されると世界中に経済的社会的な大混乱が発生するからです」と彼は続ける。

ハニーは円盤問題をよく知らない人の嘲笑や軽蔑を軽く避けて、大体に彼がやっている仕事に好感を持つ読者に自分のUFO研究活動を結びつける方法を身につけた。「このインタヴューの記事が出ると『おまえはバカだ』という電話が沢山かかってくるだろうが、一方私の仕事を推進する価値のある情報も入ってくるでしょう」と述べた。彼にとって信用のおける円盤目撃者は広範囲にわたっていて、キチガイ扱いするわけにはゆかないという。「UFOについて報告したパイロットや科学者はべつに売名屋でもなければ幻覚の犠牲者でもない」

ケアリフォーニア州モンテレイ市長ジョージ・クレミンズは自分の知識を地方新聞に提供した。彼はモンテレイ付近で飛ぶ物体を見たのだが、これはサンタクララ州立公園の山林監視人たちもその目撃の日時を証言しているとハニーは続けた。

ワトスンヴィルのシド・D・パトリックは昨年二月に円盤の乗員とコンタクトしたという報告をハニーは機関誌で書いている。乗員たちはパトリックに、われわれは大昔この地球にいたことがあるとハッキリした英語で語ったという。（ロサンジェルス・タイムズ紙七月一日付）

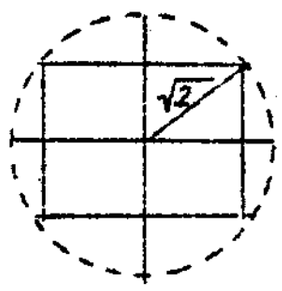


1965年のクリスマスと
1966年の元旦を迎えるにあたって
誌友各位の御多幸をお祈りいたします。

日本GAP 八幡田小弘

（以上の式はいままで発見されていないもので、先日$V=\iint_{V_1 V_2} dV$を求めて発見しました）

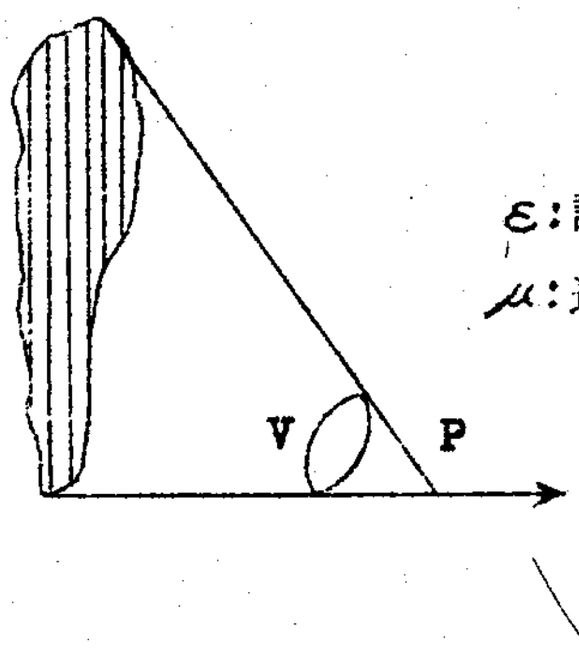
（例）　半径$\sqrt{2}$の球面上、球心からの一辺の視角 $\frac{1}{4}$（＝いわゆる角度の９０°）の球面正方形の面積を問う。



（解）　公式で$V_1=V_2=\frac{1}{4}$とおけば、$\sin\frac{1}{8}=\frac{1}{\sqrt{2}}$
だから、$\sin\frac{V}{2}=\left(\frac{1}{\sqrt{2}}\right)^2=\frac{1}{2}$　つまり
$\frac{V}{2}=\frac{1}{12}$となり　$V=\frac{1}{6}$

$$\therefore\ S=4\pi\left(\sqrt{2}\right)^2\times\frac{1}{6}=\frac{4}{3}\pi \qquad \cdots\cdots（答）$$

また空間の任意点Pに電荷密度（または磁極密度）がqの任意の形をした平面の電荷（または磁極）のつくる電場（または磁場）の平面と垂直方向の成分は、



ε：誘電率
μ：透磁率

$\frac{qV}{\varepsilon}\left(\text{または}\frac{qV}{\mu}\right)$という非常に簡単な形になります。（これもいままで用いられていない式です）

その他数学、物理のすべての面にこの視角の法則を導入すれば革命を起こすことができるでしょう。しかし数学を将来の本格的宇宙旅行に生かすために改編し立体化するのには大きな障壁（主として積分上の）がそびえています。しかしいつかわれわれはその障壁を越えるでしょう。ともかく第二の視覚の素材たる第一の視覚の基礎条件である「視角」を考究することも大切だと思います。（新刊「生命の科学」７ページをご参照下さい）

＊　　＊　　＊

先日テレパシーの実験を行ないました。実験というほどのものではなく、今後の実験への準備というほどのものです。K、A、M三君と私との四人で、ごく短時間実験したのみで、実験後はいろいろ—それこそいろいろでした—話し合って楽しい時をすごしました。御参考までに明記しますと、

（A）　2組の絵はがきを使う送受信。　（B）　色エンピツを使う送受信。　（C）　十円貨を使い、予感と心力の発動。　　の三種の実験で、少し特記すべきことはK君が

（A）で確率との比1.25を記録し、

（1.25とは12回の試験中、平均4回当たるところを5回当てたの意）

（C）で確率との比1.5を2通りの実験で記録したということで、K君は努力すればかなりよくテレパシーを開発できるものとほぼ判断しています。（1.5とは12回の試験中平均6回当たるところを9回当てたの意）

視角に関する一考察

T 生

目下人間のVisual Angle（視角）について考えています。これについて宇宙数学の新分野を開拓したいと思うのです。既成の数学では、球面の数学になるとすごくやっかいで手に負えぬくらいです。現在のロケット工学が電子計算機を拝み奉るのも無理はありません。

(1)物体の大きさ、形、位置の認知（これは特にUFOの目撃時に大切）、遠近法などの立体的把握法。

(2)定曲面上の曲線運動及び定曲面上の長さ、面積の判定。

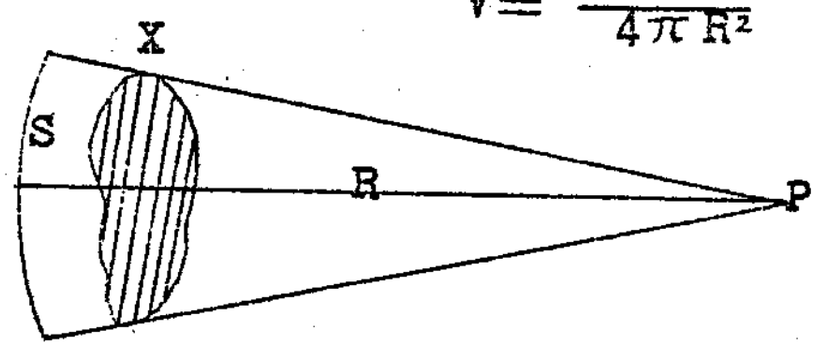
(3)万有圧力（重力の本体）の法則誘導。

(4)各種力場（重力場、電場、磁場）強度の表示。

私は次のように視角を決めて考えを進めています。

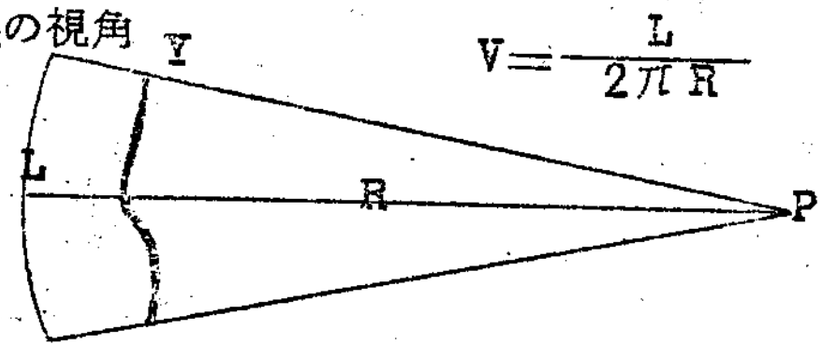
物体の視角

$$V=\frac{S}{4\pi R^2}$$



線の視角

$$V=\frac{L}{2\pi R}$$



点Pから或る物体X（または線Y）をみる視角をVとすると、

その物体X（または線Y）の、Pと逆の側の離れた球面S（Pを球心とする）に、Pから全放射した光がつくる影の面積をS（または長さをL）とすると、PからSまたは（L）をみる視角がVに等しいというように決めるのです。

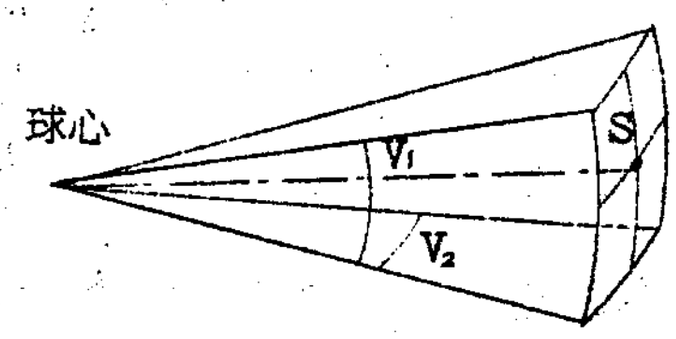
すると1点から天地全空間をみる視角は1となります。（われわれが月、太陽をみる視角はほぼ $\frac{1}{1000}$ です。）

地上から全地平線をみる視角はほぼ1であり（$L=2\pi R$）、

地上から全天空をみる視角はほぼ $\frac{1}{2}$ です。（$S=2\pi R^2$）

この視角の考えに従うと、球面上のク形の面積のようなものは次のように至極簡単に求められます。

$$\sin\frac{V}{2}=\sin\frac{V_1}{2}\sin\frac{V_2}{2}$$



＊地球上重力に直立するク形は、正しくは平面ではなく、球面をなしている。　例：水泳プールの水面は球面ク形。

でVを求め、$S=4\pi R^2V$ でSを求めます。

（右のページへ）

テレパシー講座　7

C・A・ハニー

第七課

この課ではいわゆる超自然現象なるものに関する説明を続けることにします。これは第四課と第五課で示された基礎材料を主体にしますので、この課を読む前に第四課と第五課とを復習されるとよいでしょう。

先に私は霊界の真の性質に関する知識を述べて、それはこの地上の人々によって作り出された〝巨大な幻覚の貯蔵庫〟の一部であることを明らかにしました。言いかえればそれは各種のトランス（恍惚状態）によって〝感受性の強い人〟すなわち霊媒が感知し得る〝エネルギーを持つフォースフィールド（想念波帯）〟です。この〝エネルギーを持つフォースフィールド〟はできるだけ避けねばならない、望ましからざるテレパシーの一分野です。同時に霊界なるものも死者の霊魂の真の住家ではありません。霊界が〝死後の住居〟という考え方は完全に誤っています。

第六課では、多数の円盤研究団体がこうしたいわゆる霊界のどこかで住んでいるとされている各種の昇天した大師たちとトランスによって精神的にコンタクトしていると信じきっている事実を簡単に述べました。それでは死者というものはどうなるのでしょう？　死者は依然として何かの霊界にでも住んでいて、〝感受性の強い人〟が彼らと精神的に通信することができ、亡き友人や生前親しかった人たちにこちらの想念を伝えることが可能でしょうか。答えは絶対に「ノウ」です！　真の解答は第四課に述べてあります。（注。本誌一九六四年五月・六月号に掲載。ただし品切れ）

では幽霊はどうでしょう？　これは死者の霊魂の現われでしょうか？　この答えも絶対に「ノウ」です！　こうした幽霊現象を明確に説明するために、あなた方すべてがよく知っているもの、すなわち〝夢〟について述べることにしましょう。

だれでも一度は鮮明な夢を見たことがあるでしょう。しかるに夢を見る原因をはっきり説明せよと問われるならば言葉に困ってしまうのが普通です。一般人は夢の起こる正確な理由を説明できないにもかかわらず、夢を霊魂や幽霊のせいにはしません。だれも夢は肉体の自然的な機能によって起こることに気づいています。

夢の中でわれわれは音声や視覚的な幻覚を体験します。私がそれを幻覚というのは現実の現象ではないからです。それは睡眠中の心の産物にすぎません。同じ室内にいる他人はこちらと同じ夢を見たりしません。夢は全く自分自身に属する精神的な現象です。

さて、あなたがはっきりと目覚めていて、右のように聴こえたり見えたりする夢を体験したとします。この現象は、大体にこうした現象の各種の原因について殆ど何も知っていない医者から精神錯乱ということにされて、本人はかかる出来事を口外しないという常識に欠けているというので精神病院へ送られたりします。

夢の機構と
その働き

始めに、われわれは夢が実際に発生する原因とそれに関連した化学的、電気的な性質について何も知らないと仮定しましょう。それにしてもわれわれは〝夢を見る〟ことについて何かがその原因であることは気づいています。あなたの理解を深めるために、この未知の夢の原因を〝夢の機構〟と呼ぶことにします。夢の原因の性質が何であろうと、不可解なものであろうとなかろうと、それは〝夢の機構〟なのであって、私が言おうとしていることはいずれわかるでしょう。そこで次のように言っておきます。

「もしあなたが普通の夢を見たならば、それは聴覚的、視覚的反応を起こす或る〝夢の機構〟によって現われるのである」この〝夢の機構〟についてこれ以上の知識は必要ありません。それはただわれわれが眠っているあいだに刺激によって活動を起こすだけです。そのため夢が現われるのです。

もしあなたの睡眠中にこの〝夢の機構〟の引き金が引かれたら——すなわち働きを開始したならば、あなたは夢を見ますが、それについて何も考えはしません。しかし、あなたが目覚めているあいだに引き金が引かれるならば、肉眼で見る現実の光景の上に重なった半透明の夢（幽霊）を見るのです。この場合は何かが〝夢の機構〟の引き金を引いて働きを開始すると考えられますが、その何かの一つこそ実は印象類であって、そのなかには指向性の想念波が含まれています。この印象類すなわち指向性のフォースフィールドは本人に反応を起こさせるほどに強力なものであるにちがいありません。

人々のなかには周囲の印象にたいして他人よりもうんと感受力が鋭敏なのがいます。また或る人は疲れやすいためにこうした印象をキャッチするには完全な弛緩状態になる必要がありますし、また或る人は騒然としているときには想念の訓練を妨害するような印象類によってかく乱されます。ところが印象類にたいしてきわめて感受力の鋭敏な人は、起ころうとしている物事にちょっと気づきさえすればただちに刺激を受けてきわめて容易に反応を起こし、それを注視します。これが意味するところは、幽霊を信じている人や印象類にたいして敏感な人は容易に幽霊その他の異常な現象を見やすいということです。

幽霊屋敷—かかる現象の二つの原因

(1)大抵の幽霊屋敷は何かの悲劇があった過去と関連しています。このような家において出て来る幽霊は殺された人の亡霊ということになっています。たしかにときとして死んだ人の姿をした亡霊が目撃されたり、それの音声が聞こえたりすることがあります。しかしそれは死者の亡霊ではありません。こうした誤った考え方は迷信から出たもので、人間の真の性質について殆ど理解していない人によって広く信じられています。

真相を説明するには例をあげるのが最上ですから、次のような事件があったとします。或る人が淋しい田舎道をドライヴしていて高架道路の或る曲り角まで接近したとき、本人は突然道路のまんなかに立っている一人の男の姿を見ました。それで衝突を避けようと必死に努力しましたが、前方で停止するにはすでに間に合わないことに気づきます。あまりにスピードを出していたので、立っている人間に直進してそのまま通過します。行き過ぎて車を

停めてから後退してみますとだれもいません。急に本人はたしかに人をひいたのに車の衝撃を感じなかったことを思い出します。そこで状況についてわけがわからなくなり、そのまま車に乗ってドライヴを続けます。

二、三日してからこの事件の類似の報告が、同じ道路を走った他の多くの運転者から入って来ます。すると新聞にはこの幽霊事件が大々的に報導され、まもなく全国の人がその幽霊の出没する道路を知るようになります。

数ヵ月たって、依然として報告が入り続けた後、この事件の真相を知っている人がその現場に現われます。現場で車を停めてから土手を降りて行き、そこで地面に立っている鉄のパイプに突き刺さった人間の骸骨を発見します。そこは雑草が深く生い茂っているために道路からは見えません。

調査の結果、死んだ男は高架道路から飛び降りたあとしばらくのあいだ生きていて、意識を保っていたらしいことが判明します。本人がパイプに突き刺さって死の苦痛にもだえているときに、心中に存在した激烈な感情は想像できるでしょう。その想念の力は苦痛と、道路上を通る人が自分を助けてくれないという悲痛な思いとで増大されます。

この激烈な想念波（フォース　フィールド）は文字通りその場所一帯に放射され、その地域を形成している細胞に染み込みます。言いかえれば、その地区の有機物や無機物を形成している原子のフォースフィールドが、死にかかっている男の想念によって変調されるのです。この変調されたフォースフィールド、すなわち男の最後の激しい想念から成る大きな〝知識の貯蔵庫〟が、テープに録音された音楽のように男の死後長く存続するわけです。

ところでその道路を通る人のなかにはきわめて強い印象しか感受しない人もありますので、その場合は何も体験しないでしょう。また或る人はきわめて微弱なフォースフィールドから成る印象を感受するために、その〝変調されたフォースフィールド〟に接触した場合、本人の〝夢の機構〟の引き金が引かれます。すると助けを求めて車を停めさせようとしている人間の姿を見るわけです。本人の精神の組織が、死にかかった男の最後の強烈な想念を自己の意識的な知覚に翻訳したわけです。幽霊現象に関連した迷信によらなくても、こうした事件が容易に発生する理由はこれでわかるでしょう。また目撃者の記述の内容が死者の死の直前の姿と一致している理由もわかるでしょう。このような幽霊現象は死の現場一帯に存在している印象類（想念波）の中で発生するのが普通です。

幽霊物語に変死が多く関連している理由は次のとおりです。いわゆる幽霊屋敷や亡霊出現物語には変死がよく関連していますが、これはきわめて簡単な理由によるものです。一般人は一般の通行人がキャッチするほどの強烈な印象を放ちませんが、惨劇による変死の如き事件が発生した場合は、死者の肉体の反応とそれに伴った激烈な感情とによって、犠牲者は特に強烈な想念フォースフィールドを放射します。

これは細胞中に残される印象が通常のそれよりもはるかに強力であることを意味します。そこで結局、異常に鋭敏な感受力を持つ人か、または〝夢の機構〟の引き金が引かれて活動を開始した人は、その強烈な印象に反応することができるのです。現場一帯

の物質の分子に与えられた印象が強ければ強いほど、右の人たちは幽霊や亡霊を〝見る〟わけです。

(2)いわゆる幽霊屋敷については別な理由もあります。第六課では、この地上に存在する四種類の想念の影響について列挙しました。この四種類がすべてというわけではありませんが、大体に主なものです。これについては再述を避けることにします。ここで問題になるのは第二種類のもの、つまり邪悪な目的のために想念力を故意に利用する場合です。

今日見られる好ましくない事実は、無数の人が何かの思惑があって積極的にこの指向性思念力を応用しているということです。これを行なう方法はあとで説明しますが、それによって起こる結果についてはここで述べましょう。

これについて先ず論じなければならないのは、ひんぱんに発生し、しかも亡霊や幽霊屋敷の話を生み出す現象です。この場合は先に述べたような惨事は関係ありません。加うるに現場の物質から放射される波動も関係ありません。次に実例を少しあげましょう。

例1　俗に幽霊屋敷といわれる家のあちこちで奇妙な物音が聞こえる。だれもいないのに室内で深い呼吸音が聞こえる。同時に変なにおいがするが、この場合それは強いタバコのにおいであった。室内ではだれもすっていないのに―。

例2　室内にだれもいないのに室を横切って歩く足音が聞こえる。足音がするたびに、目に見えない足が踏むかのように敷物に足跡がついてゆく。これによって目に見えない人間が実際に室内を歩いたりすわったりしているかのように思われる。

例3　右の足音以外に、見えない手がその場にいる人の肩に置かれるのが感じられる。そのあと透明な人間の姿が現われてきて、続いて消滅する。においや物音はときとしてこの現象に伴うことがある。

例4　姿のない声が聞こえることがある。その声は「ハニーの書物は悪魔の書いたものだから焼いてしまえ」と言ったりする。これを聞いた人は宗教心の深い婦人だったので気も転倒し混乱した。というのは奇怪な声を聞いたという事実そのものが、教会の教えによれば〝悪魔の仕業〟であると思われたからである。不幸にして現代の無知な多くの教会はテレパシーや超心理現象のすべては悪魔の力によって行なわれると本気で教えている。これは昔、女魔法使いが悪魔の仲間であると考えられてこれを火刑柱で焼き殺した多くの人間の態度と同じである。

右の例4に類似した例はまだ沢山ありますが、読者の殆どは先に述べた例に類似した事件についてよくご存知のことと思います。こうした現象のすべてが、これから述べようとする理由によって発生するのだというわけではありませんが、大部分は以下の理由によって起こるのであって、それ以外の少数の例は各種の精神的な病気が原因です。これまで私が援助を求められた例のすべては完全に外的な原因によるものでしたから　容易に難をのがれることができました。

前記各幽霊現象の真の原因

本課の始めに〝想念による影響第二〟をあげた事実は、幽霊屋敷に関連した現象の背後にある真の原因にたいして読者を注目させる

でしょう。この古い地球という世界に存在する人間のなかには、他人のものである金や財産を横取りするために手段を選ばずあらゆる策略をつくしながら時間と能力を費やしている者がいます。この者たちは幽体飛行や想念波の発射に高度な能力を持つトランス霊媒を応用しています。ここで定義するためには、この好ましくないフォースフィールド（想念波）を〝マイナスのフォースフィールド〟と呼ぶことにします。好ましいフォースフィールドを〝プラスのフォースフィールド〟と呼びましょう。ただしこれはこの講座専用語であって、われわれの心中で二つの異なる種類のフォースフィールドを分けておくだけです。電気の法則に関する限り、一方がマイナスで他方がプラスであるとは実際には言えません。

右のフォースフィールド（想念波）を応用する者たちは、人間の想念が他人に影響を与え得るという事実をよく知っていて、大抵の場合、遠隔催眠術ともいうべき方法で他人の心をコントロールしようと懸命になっています。彼らは自分から何マイルも離れた他人に催眠術をかける能力を発達させているのです。そんなことをいったって非科学的ではないかと考える人があるかもしれません。それなら私が一九六三年に発表した〝ソ連のテレパシー実験〟と題する記事をごらん下さい。（注。本誌一九六三年七月・八月号に訳文を掲載）これはソ連の実験に関する記事で、米国の通信社が伝えたものです。この記事の基本的な要点は次のとおりです。

「1　テレパシトに関するソ連一流研究家の一人は、レニングラード大学生理学主任教授ソオニード・L・ワシリエフという科学者である。彼の言う〝遠隔暗示〟の実験は他の多数の国の科学者間に大きな動揺と議論を起こした。

2　この問題にたいするワシリエフの取り上げ方は少なくともありふれた方法とはまるで異なるものであった。彼は催眠術を応用し、同時に脳内の電気的な変化を測定するために各種の電気装置を用いた。加うるに麻酔剤を用いていろいろな幻覚を起こさせる実験を多数行なったが、これは現在米国で行なわれている実験にきわめてよく似ている。

3　ソ連ではこの研究を重視して、モスクワとレニングラードにテレパシーの研究所を設立している。ワシリエフが被験者をトランスにおちいらせるのに言葉の暗示を必要としないほどに進歩している。相手が催眠状態になるように思念するだけだ。彼はこれを〝無言の暗示〟と呼んでいる。彼は遠隔地にいる被験者に自己の能力や実験の性質などを一切知らせないで、相手を催眠状態にする能力を完全に発揮した。

4　最近ワシリエフは他の数名の科学者と一緒に実験を行ない、いろいろなヒステリー症状の病人を応用した。

5　被験者は右手につながれた、空気の入ったゴム風船を持っていて、これが電磁的な性質の機械装置へパイプで連結し、この装置が別な室にいる科学者にあらゆる結果を知らせるのである。この特殊な装置はカイモグラフと呼ばれ、グラフ上に自動的に圧力の変化を記録する。

6　被験者はこの実験の性質を知らない。本人はただリズミックな運動によって風船を押しつけるだけである。押しつけるたびにカイモグラフは隣室のグラフ上に空気の圧力の変化を記録する。

これはパイプで伝えられる。

7　すると任意な時にワシリエフは被験者にたいして「眠れ」という命令を思念する。この思念の時刻を記録し、次に一定の時間が経過してから「目覚めよ」という命令を思念する。するとカイモグラフによる記録は、「眠れ」という命令が送られたとき風船を押しつける動作が中断し、「目覚めよ」という命令が送られたとき被験者の動作が再び始まることを示した。この実験は二百六十回の試みのうち九〇パーセントが成功した。この結果科学者団の結論は、被験者が催眠状態におちいるのは全く心の暗示、すなわちテレパシーによるものであるということであった」

右の実験は、〝心を手段としてだれかに反応を起こさしめる〟現象は、それを催眠術と呼ぼうが心の影響と呼ぼうが、実際に可能なのであって、或る種の人々がうまく応用している方法だということを科学的に実証したものです。

ワシリエフの実験はまだきわめて単純なものですが、現在地球の多数の人がこの想念伝達の能力を有していて、相手が印象類にたいして感受性を持たなくてもそれに影響を与えることができるのです。特に〝心霊派〟の人のなかにはきわめて強力な思念の能力を持つ人がいて、相手が抵抗しようとしてもそれを屈服せしめたりします。

物理的な現象も想念波の指向によって起こる

前に述べた例4（姿のない声を聞く例）は、各種の方法で起こすことができます。これについて必要なのは思念者が自分の想念をこれと思う相手に向けて、望ましい結果がすでに発生している状態を心に描くだけでよいのです。そうすれば相手はそのとおりの状態におちいることになります。

多数の読者にとってこれはきわめて困難かまたは全く不可能な事のように思えるでしょう。しかし断言しますが、多くの人間がこの能力を持っていて、悪い目的にこれを意のままに応用しています。彼らがマイナスのフォースフィールド（思念波）を他人に向けると〝夢の機構〟を始動させます。するとそれは思念者の意志に従って変化し得る体験を生じます。その思念がどこまで遠く到達するか、いかに激烈なものになるかは、思念者の良心の程度次第です。

右の方法に或る点で類似した別な方法も用いられます。この場合は放射された思念波の結果を〝物質にたいする心の影響〟と分類してよいでしょう。なぜなら物質が動かされ、物理的な動揺が思念波のみによって起こされるからです。これは思念者が相手の〝夢の機構〟を始動させさえすればよいので、はるかに容易なことです。すると犠牲者は思念者の計画どおりの結果について幻覚を体験するわけです。

数年前まではこんなことが可能だとはだれも信じませんでした。それを信じた人はその理由について何ら科学的な理解もなしに盲目的に信じていただけです。

今日殆どあらゆる科学者は思念力が電気的な力を生み出す事実を認めています。あらゆる想念や感情は確実に測定し得る周波数を持つ、確実な電気エネルギーであることを明確に示すことができます。人間の感情の変化はすべて肉体内に電圧を起こすことがますます解明されつつあります。この点から、肉体に想念波を浴

びせることによって（その想念波そのものが電気的なものです）肉体の各器官に〝電圧〟が発生するということは容易にわかるはずです。

フォースフィールド（想念波）の放射は病気の治癒の如き良き物事にも用いられる

当然考えられるように、明るい想念波を右のようにして発射するのです。すると病気の治癒を生ずることがあります。どうしてこれが起こるのかといいますと、たとえば腕の折れた人について考えてみましょう。ここでは精神病患者よりも肉体的欠陥を例にあげますが、これは真の治癒とは組織の再生すなわち折れた骨の接合を意味すること、しかもせいぜい数秒間で完全な治癒が行なわれることを説明するためです。

人間の腕の中で骨が折れたとき実際には何が起こるでしょう？現代の原子物理学によれば、物質の原子は物質の各分子間で連結されている〝微小な〟結合力によって互いにつながれています。この〝結合力〟はまだよく理解されていませんが、ともかくこの説は治癒がきわめて簡単に起こる理由をわからせてくれます。

腕が折れると、折れた骨は二つに分かれてしまうので、〝微小な結合力〟はもはや近隣の原子団を結合させることができません。折れた二つの骨をいかにしっかりと押しつけてくっつけてみても、原子の小宇宙的なレヴェルにおいてすら両者間の距離はやはり天文学的な莫大な距離を保っています。言いかえれば、折れた腕を構成している原子が地球ほどの大きさになったとしても、各電子と微小なフォースフィールド（結合力）とのあいだの距離は太陽系の各惑星間の距離と同じです。

精神的治癒が起こるのは、（教会では神癒と呼んでいますが）本人のフォースフィールド（思念波）の発射が、原子間の微小なフォースフィールド（結合力）を次第に密接に結合させて、ついに通常の結合状態が再び確立されるからです。このことが起こると骨折は治り、すべてが元通りになるのですが、それは〝自ら治癒した〟といってよいでしょう。以上の説明がよくわからねば、第二課の、小さな個々の磁石が互いに連結し合って大きな磁石になる個所を読み返して下さい。次に、各分子が近づけられるとその微小なフォースフィールドが他の分子のフィールドと結合する有様を思い浮かべてごらんなさい。

科学によれば、あらゆる肉体的病気は肉体中の各原子の電子が正常な位置からはずれるために起こるとされています。これが事実とすれば、病気の治癒というのは電子をもとの正常な位置に押しもどしてやることによって起こることになります。それをもどす力はフォースフィールドの普通の吸引・反発の作用です。

フォースフィールド（想念波）は悪しき攻勢にたいする防壁として役立つ

人類の進化においてだれもが自分の方へ発射された想念波に気づくようになる時代が来るでしょう。そうなりますと人間は自分に向けられるいかなる想念波にたいしても自己を守る方法を理解するようになるはずです。この点については本講座でもっと詳細に述べるつもりですが、目下はただ防壁となるフォースフィールドは意

のままに個人の周囲に設けることができるとだけ述べておきましょう。好ましくない想念波やその影響にたいして意識的に（注。アダムスキーのいう意識とは異なって、普通の意味の意識）心で反発することこそ防衛のために全く必要です。

警　告

或る種の多くの人間が善良なまじめな人々から金銭や財産をまきあげようとして、右の好ましくない方法を応用しています。この者たちは他人を精神的にコントロールする種々の方法を教えなり促進したりし、同調者に自己催眠やトランスを行なわしめていますが、これは被害者の心による自己抑制力を失わせ、ますますワナに落ち入らせることになります。或る種の心霊派は悪質な手段を弄しています。彼らはトランスになり、低い単調な声でつぶやいて、それを聞く人々を心の催眠状態にします。そのような場合は真のトランスではなく、みせかけのトランスにすぎません。彼らはウイジャボード（注。霊媒用の文字板）や類似の道具を用いますが、それは同調者をコントロールするのに役立つからです。真の知識の探究者はこんなものを必要としません。

UD学生部設置のお知らせ！

最近日本GAPの若い学生会員間で、会合や機関誌等を通じて相互の親ぼくと宇宙研究の前進を計ろうではないかという気運が高まってまいりました。有志の方々の賛同も得ましたので、ここに日本GAPの内部グループとしてUD学生部を設けることにします。次に規約を掲げますからふるってご参加下さい。

【性　格】UD学生部は建設的な協調精神により、謙虚に公正に宇宙の探究を行ない、会合や機関誌等によって互いに意見の交流

生命の科学

注文殺到！

ジョージ・アダムスキー著　¥300
久保田八郎訳　〒50

先に本誌に連載して好評を博した"生命の科学"講座を単行本として刊行しました。これは生涯を真理の使徒として挺身したジョージ・アダムスキーの絶筆であり、現代最高の真理の書として不滅の光を放つものです。これを理解されればあらゆる苦悩や不幸は解消し、あなたに無限の活力と勇気とが湧き起こり、生活に驚くべき奇跡が発生して環境は一変するでしょう。ぜひ座右におそなえ下さい。悩める知人にもお贈り下さい。今後再版が出る見込みはありません。小部数限定版につきご注文は早目に本会へ。

＊美麗タイプ印刷。上質紙使用。送料は2部70円。3部100円。4部以上は120円。

を計り、忍待強く互いに向上してゆくことを目的とする。

【入会資格】事情により当初は小、中、高校生を対象とする。

【活動と会費】ときどき（できれば毎月）会合を開き、機関誌を発行し、あるいはリクリエイションに山登り、UFO観測、レコード鑑賞を行なったりして愉快なひとときをすごす。

都内外の人はなるべく会合に出席し、地方の方々とは文通により親ぼくを計る。会費は一ヵ月一〇〇円（内訳は連絡費二〇円、機関誌代八〇円）。ただし一ヵ年分前納の場合は一、〇〇〇円とする。お金の都合のつかない人はその旨を斎藤委員に通知されたい。便宜をはかる由。

【発足予定日その他】発足は今年の末か来年の始めの予定。目下準備中。希望者は今からUD学生部準備委員（東京都新宿区戸山町四三の三番地斎藤雄久君）に入会申込みだけしておいて下さい。その際各種の提案、希望事項などがあればついでに同君へ直接お伝え下さい。これに関する照会はすべて同君宛とします。ただし入会手続きは、正式に発足して案内書を受け取ったあとで結構です。予定では、発足後UD学生部の研究室を都内に設置し、ここを各種の研究活動の中心場所とし、すが、ここはまた地方の学生会員が上京されたとき気軽に宿泊できるようにもなります。

編集後記

◎本号は発行が大変に遅れてしまい、全く申し訳ありません。月別でいえば九月・十月号となるのですが、今更そんな表示もできません。注意！ 各種の事情により今後本誌を定期的に隔月刊として、発行する、ことが困難になりましたので、事態が好転するまで、暫定的措置として不定期刊とし、二、三ヵ月に一度の割で、出す、ことにしました。悪しからずご了承下さい。ご納入の会費はそのように計算し直します。発行を中止するようなことは決していたしませんから、その点はご安心下さい。次の第三十一号は来年一月末か二月上旬に発行の予定です。

◎右の欄でお知らせしましたように〝UD学生部〟というのが設置されることになりました。準備委員の斎藤雄久君は高校一年生ですが、きわめてしっかりした優秀な学徒です。高校生以下の方はふるってご参加下さい。大学生の方はご遠慮下さい。

◎一方UDの会合は毎月第二日曜日に確実に行なわれています。場所は世田谷区成城町五六一の中田晴久氏宅（電話、四一六の一三五〇）で、九月は八名、十月は十二名、十一月は十六名と次第に参加者が増加しています。人間はただ一人で静かに冥想することも必要ですが、ときには直接に会って話し合うことも大切です。何か得るところがあるはずです。この例会について詳細は本誌七月・八月号をごらん下さい。個々に通知状をさし上げませんので、毎月第二日曜日にはお気軽に中田氏宅へお出かけ下さい。

◎アダムスキー撮影の円盤記録映画フィルムは借用申込みがしてありますものの、プリント本数が少ないためになかなかまわってきません。しばらくお待ち下さい。

◎〝生命の科学〟は刊行後注文が殺到しました。厚くお礼を申し上げます。まだ在庫していますので未入手の方は早目にご注文下さい。代金後払いの便宜も計ります。

◎本誌の既刊号は目下次のものが各少部数ずつ在庫しています。六三年　九月・十月号（送料共一〇〇円）、六五年　五月・六月号、七月・八月号（各送料共一三〇円）

◎本誌創刊以来満四年と数ヵ月になります。その間アダムスキー

の執筆になる体験記、論文等を掲載してきましたが、それはかなりの量になります。なかには土星旅行記や金星旅行記など興味深い記事も含まれていますが、既刊号が殆ど品切れになったために最近入会された方はそれらの内容を知ることができません。そこでこれまでに掲載されたアダムスキーの記事をまとめて編集した上、単行本として他の出版社から出していただこうと計画しています。ご期待下さい。

◎これまでにアダムスキーと私を強く支持して下さった方のご氏名を腐蝕しない金属板に刻み、同じものを二枚作成して、一枚は米国の本部へ送り、一枚はこちらで保存して永久に残そうという計画も持っています。これは早急のことにはなりませんが、いつかは実現するでしょう。私個人としましては、いつの日かアダムスキーは偉大な先駆者として万人に認められることになると確信しています。それは絶対的な確信です。

◎アダムスキーほどの人物が普通人と同様の死に方をしたというのはおかしい。当然エリヤの如く〝火の球（宇宙船）〟に乗せられて別な惑星へ連行されるはずだとお考えになる方があるようです。これは善意による見解でしょうが、これについて私見を述べれば次のとおりです。現在一般人の大部分は円盤の存在を信じていないし、ましてアダムスキーについて知っている人はごくわずかな限られた人々にすぎないという状況下に、もしア氏が宇宙船で肉体のまま〝昇天〟したとしても、それを認める人は皆無に近いであろうことを考える必要があります。大衆は信じないどころか、反アダムスキー派はここぞとばかり攻撃するでしょう。「アダムスキーは失踪した。別な惑星へ行ったかの如く見せかける最後の大芝居！」それよりもむしろ普通の病院で医師団の注視の中にまともに死なせるほうが、「肉体的にはこの世界から姿を消した」という事実を人々に確認させることになり、トラブルの発生を防止することになります。しかしそれでさえもジャーナリズムは「アダムスキーは悪い宇宙人によって消された」とか「ナゾの死をとげた」などと報導し、意地悪な或る団体は「ペテン師、淋しく去る」などとバ倒しています。（じぶんたちが死ぬときだって淋しく死ぬるにきまっているのに！）こうなると驚異的な〝現身往生〟はむしろ不利な結果を残すことは明白です。また、ワシントン広場の如き場所に円盤が着陸してア氏を乗せてゆく光景を大勢の人に目撃させたらどうだろうという案もあったでしょうが、これはブラザーズ側にとっては言語道断なことでしょう　なぜならその〝乗物〟をはるかな宇宙の彼方の別な惑星から来た驚異的な宇宙船だということを認める人はおそらくなく、そうだと知らされたところで目撃者は非常な恐怖心を起こして大騒ぎになり、結局官憲が厳重なカン口令をしくことになって話はチョンです。とにかく猜疑と恐怖とに満ちたこの世界にたいするブラザーズ（進化した惑星の人々）の行動はわれわれの推測をはるかに超えた高度な配慮のもとになされていると思います。

◎新年が近づきましたが今回は年賀状の発送を一切中止いたしますのでご了承下さい。そのかわりにといっては失礼ですが本誌中に祝詞を掲載いたしました。（久）

日本GAPニュースレター　1965　第三〇号
翻訳編集発行人　久保田八郎
発行所　日本GAP（別称・UADP）
（別島根県益田市益田古川
振替・松江　二六三〇
久保田八郎個人名義）
頒価一三〇円・送料二〇円
昭和40年12月1日発行
不定期刊
第30号